ウルリム
響
울림

聖公会生野センター機関誌

第32号
2004年8月10日発行

題字：康秀峰

URL http://www.nskk.org/province/ikuno　E-mail:ikuno@nskk.org

日韓聖公会宣教協働20年を覚えて

五十嵐 正司

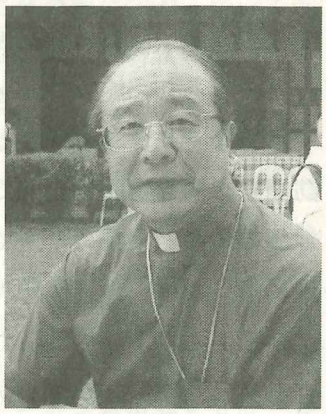
九州高速道路を運転していますと、「歓迎」の日本語の下に、英語、韓国語、中国語で同じように書かれている看板を見ることがあります。気にして見ていますと、福岡の町の看板にも４ヶ国語で記された看板が多くあります。

韓国、中国、アジア諸国に近い九州。弥生時代から九州は大陸との交流が頻繁に行われていた証拠を吉野ヶ里遺跡に見ることができます。

大陸と九州との交流は様々な交流があったようです。平和時だけではなく、戦いの時期も。

三韓時代の白村江の戦い、元寇の乱、豊臣秀吉の文禄の役、日韓併合。それらの歴史の跡が九州には手で触れるように遺されています。大宰府が海岸から離れて建てられているのは白村江の戦いの結果。博多湾沿いに防塁があるのは元寇のゆえ。唐津に名護屋城があるのは文禄の役のゆえ。朝鮮半島から強制連行され、炭鉱で働かされて亡くなった人々の鎮魂碑。

歴史の中には、このような血を流した跡があります。しかし、また違った関りを見ることもあります。対馬（厳原）の宗家は朝鮮通信使の受入れ窓口として、江戸幕府と朝鮮の良好な外交関係維持のため努めていました。国レベルだけではなく個人レベルでも頻繁な交流があったようです。宮崎県の南郷村には百済の館と称する建物があります。朝鮮半島で滅ぼされた百済王族が流れ着いた所とされ、遺品である銅鏡などが近くの博物館に展示されています。また、霧島山の中で最も高い山は「韓国岳」と命名されているのです。



朝鮮語発音の地名が九州各地に命名されている事実は朝鮮半島との交流が、日常的に、しかも親密にあった印ではないでしょうか。古くは、九州と朝鮮半島は同じ文化圏にあったのではないかとさえ思えます。

わたしは九州の地で生活した故に、この様に受け止める者となったのでしょう。しかし、これ程に離れがたく、既にある日韓関係であったにも拘わらず、わたしが意識的に関わるようになったのは1984年の日韓聖公会宣教セミナーが始められてからです。

20年前、初めて韓国を訪ねた時の緊張を思い起こします。聖職同志の話し合いでしたが、厳しい緊張の中での対話でした。しかし、その後の継続的な交流と日韓の歴史を学ぶ中で、また教会信徒（教会委員、青年、婦人たち等）の相互訪問、教会協働などを通じて、今は会うことが楽しみな関係と成っていることを嬉しく思います。

第２回セミナーでの金徳換氏（大阪生野にある聖和社会館の当時の館長）の発題の中での言葉「私たち在日韓国人は本当に不幸な歩みを今日までしてきた。」は心に重く響く内容でした。その後、わたしの教会での働きとして、取組むべき課題となっております。

（いがらし・しょうじ　日本聖公会九州教区主教）

もくじ

1. 日韓聖公会宣教協働20年を覚えて
2. 時のしるし
〈軍・国家の論理〉の連鎖を断ち切るために
3. 韓国市民の眼⑪　友情？
4. 「冬のソナタ」と「ハーストーリー」
5. 日韓聖公会の協働のはじめ
6. 多民族・多文化共生のすすめ⑪
韓日条約40周年と朝日国交正常化交渉の巡り合わせ
7. 友情の40年と言うけれど
8. こんな本あります
本から「在日コリアン」を考える⑱
9. 詩　「越境から跨境へ」
10. のりばん　はじめました／余韻

〈軍・国家の論理〉の連鎖を断ち切るために

西原廉太

この９月に、立教大学の授業として、４泊５日という短い期間であるが、学生20名、教員・スタッフ５名で沖縄を訪れる。テーマは「沖縄から見たオキナワ・東京から見たオキナワ」。歴史、戦争、基地、経済、文化、芸術といったさまざまな角度から沖縄に迫ろうとするものであるが、その際に沖縄の人々が「沖縄」を捉える視点と、本土に住む者たちが見る視点の違いに注目する。今回は、沖縄国際大学の学生・教員の協力もあり、すでにインターネット掲示板上で活発なやりとりが始まっている。同じ場所を訪問し、同じ物語に接したとしても、おそらく沖縄の学生と東京の学生では受けとめ方が異なるに違いない。沖縄国際大学は普天間基地のすぐ横にある。下見で伺った時、教室の窓から爆音と共に攻撃ヘリが舞いあがるのに仰天したのだが、沖縄の学生たちは平然としていた。彼女、彼らにとっては日常の光景なのであった。

普天間の「嘉数の丘」からはこの普天間基地が見渡せるだけではなく、読谷海岸に上陸した米軍と日本軍の壮絶な激戦があった前田高地もすぐ前に広がる。私たちは、この戦争がいかに沖縄の民衆を犠牲にしていったかを、この高台に立って学ぶ。実は、自衛隊の若い隊員たちも、研修のためにこの丘に立つ。しかしそこで教えられるのは、長期間にわたってゲリラ戦で米軍の侵攻を食い止めたその戦闘がいかにすばらしかったか、である。同じ場所に立っても、180度異なる説明がなされる。そして眼前には普天間市をドーナツ状に繰り抜く形で基地が広がる。市民は、向こう側に行くにも、大きく迂回を余技なくされ生活も寸断されている。まさに、〈軍・国家の論理〉が〈民衆の論理〉を踏みにじる姿がそこにはある。

この〈軍・国家の論理〉は押し留まることをしない。普天間基地返還運動に対する、この論理からの回答は、沖縄北部の辺野古への基地機能移転であった。移転予定地の辺野古では、工事着工に繋がる防衛施設局によるボーリング調査を阻止すべく、「辺野古の命を守る会」を中心に現地座りこみが続けられている。すでに４ヶ月近い座りこみである。この座り込みには多くのキリスト者が参加している。私が中部教区名古屋学生青年センターで働いている頃の仲間でもあった、日本キリスト教団沖縄教区うふざと教会牧師の平良夏芽さんは、教会の信徒たちと共に、この座り込みを続けているが、「私たちは活動家ではないし、なるつもりもない。私たちは、徹頭徹尾キリスト者として、聞き、祈り、決断して行動し続けているだけである」と言う。

５月に、辺野古を訪れた時、平良さんはこう説明してくれた。「すぐ隣のフェンスは、米軍のキャンプシュワーブなのだけど、イラクのファルージャ住民虐殺の主力部隊が、この基地の海兵隊なんだよ。」ある意味、衝撃的であった。辺野古とイラクがダイレクトに結ばれるのである。ある沖縄の方はこう叫ぶ。「我ったぁ沖縄人は、このような、沖縄が戦後60年近くも世界の人々の殺戮侵略する基地となっている現実を容認することはできない」。万一、辺野古に新海上基地が出来れば、それは間違いなく朝鮮半島にさらなる緊張をもたらすものとなろう。

このような〈軍・国家の論理〉の途切れることのない連鎖を私たちは〈民衆の論理〉で切断しなければならない。この切断の作業は、もちろん簡単なことではない。しかし、一方で実にシンプルなことだと言いえるのは、私たちキリスト者が〈民衆の論理〉に立ちきるということは、つまりは〈イエス・キリストの福音〉を徹底して生きることに尽きるからに他ならない。

（にしはら・れんた　中部教区司祭、立教大学教員）

友情？

姜恵楨

6月30日水曜日の午後2時過ぎに電話が鳴った。韓国挺身隊問題対策協議会の金東姫（キム・ドンフィ）だった。「金順徳（キム・スンドク）ハルモニが亡くなりました。」挨拶の声が明るいとよく褒められる彼女だが、この日の声には抑えた響きがあった。数年間、何度も繰り返してきた言葉…「ハルモニが亡くなりました。」

金順徳ハルモニは1921年慶尚南道の宣寧で生まれた。5人兄弟の貧しい家だった。幼い10代の1937年、日本の工場で働けば家族の生活が少しは楽になるだろうという言葉を信じて海を渡った。だが、待っていたのは地獄の生活。彼女は日本軍に性奴隷を強いられた。1992年に名乗りをあげた金ハルモニは、それまで自らの人生を一生恥じて生きていたという。辛い体験を語るときは、うつむき加減で不安そうに手を動かしていた様子が思い出される。だが、封じれた歴史を語り行動しつづける中で、彼女は段々強くなっていったように思う。日本軍「慰安婦」問題解決を求め、毎週水曜日正午に日本大使館前で欠かさず行われている水曜デモ。金ハルモニはその場に12年間立ち続けた。そして、613回目の水曜日、帰らぬ人となった。踏みにじられた尊厳を自ら取り戻し、未来のために諦めることなく証言を続けた金ハルモニを、多くの人が愛し心から尊敬した。

先の7月に行われた韓日首脳会談の報道を見ながら、私は金ハルモニを思い出していた。韓国の大統領は、解決の難しい問題を論争し続けることは両国民の感情を刺激するだけとし、自分の任期中には歴史問題を韓日政府間の議題として取り上げないと発言した。日本軍性奴隷被害者をはじめとする国内各界からの厳しい批判を受け、大統領府は「日本の責任と自覚を促し、日本国民の自発的な解決努力を求めたのが発言の真意」であると直ちに釈明を出したが、ハルモニたちの怒りはおさまらなかった。そして、日本政府や国民は免罪符を与えられたつもりで喜ぶのではないかと、心配を隠さなかった。金ハルモニも生きておられたら、やはり同じ反応を示したに違いない。

韓日両政府は、2005年の韓日国交正常化40周年を「友情の年」にすると宣言しているが、私はそこに大切なことが欠け落ちていないかという憂慮が拭えない。年に何度も接する第2、第3の金ハルモニの訃報に、悔しい思いをせずに済むような韓日友情の未来が、本当に目の前に広がっているというのだろうか。それは、祖父母の代の怨念に引きずられ、解決されぬ過去の問題にしがみついているのではない。歴史問題を解決するまで友情を語るなと、多様な韓日の出会い方を全て否定しているのでもない。心から理解しあいたいのか、仲良くなりたいのか、共に未来をつくりたいのか、そしてどういう友情を育みたいのか。そんな問いを投げるとき、いまを生きる私たちがこれまでの歴史のテキストを無視して答えを出せるとは、私は思えない。いま、歪んだ韓日関係の歴史と向き合って教訓を活かさなければならないのは、過去の被害者の人権が現在も傷つけられているからであり、私たちが過去の過ちに蓋をすれば、私たち自身がいま犯す過ちを許してしまうことで新たな別の被害者を生むことになるからである。

韓日間では様々な市民レベルの交流が広がり、両国の友情という言葉が違和感なく語られるようになった。そのことは素直に嬉しい。だが、一方で両国政府は米国のイラク戦争に仲良く軍隊を派遣するような「友情」をも築いている。おそらくイラクでは、金順徳ハルモニのように一生癒されぬ傷を抱える人が、何千人、何万人も生み出されていることだろう。過去の戦争・抑圧という加害に背を向ける加害国と、それを追認しようとする被害国が、一緒になって新たな被害者を生み出している皮肉な今の現状は、ある意味では論理上の必然かもしれない。これが乗り越えるべき、韓日友情の現住所である。

（かん・へじょん　日本の教科書を正す運動本部［アジアの平和と歴史教育連帯］国際協力委員長）

「冬のソナタ」と「ハーストーリー」

菊池 邦杳

1984年10月6日、初めての飛行機に乗り、太陽が眩しく、白雲はさらに白く、紺碧の空を静かに機体は飛んだ。機窓から陸地が見え始めたが、土色の山肌には緑が少なかった。機内には多くの在日韓国人も搭乗していた。「朝鮮戦争で山があんなになっちゃったね」という声。会話から、戦後初めて帰郷する在日の方々のよう。かつて、戦後の混乱が静まろうとしていた頃、北と南に別れた朝鮮半島には実質上アメリカ軍と中華人民共和国・ソビエト連合軍の戦争で、山の形が変わるほどに爆弾、砲火を浴びて地肌には草木がなくなったと言われる。南北分断の犠牲になったその山を、やはり分断の犠牲になった在日の方々と眼下に見ながらソウルに降り立った。第１回日韓聖公会宣教セミナーの時である。

その１年前から日韓聖公会宣教セミナー準備委員会が構成され、自分がそのメンバーに加えられたがかなり躊躇した。準備会で学ぶ度に、韓国朝鮮関連の問題に無知であることがわかった。40歳代のその頃、働き盛りの時に仕事を休んでまでも協力しなければならない教会の役割だろうかと、思い悩んだが、委員長の主教さんの「なに、適当にやればいいよ」という言葉にだまされて（？）ズルズル引き込まれてしまった。それも、歴史を知れば知るほどに、日本人としての責任のようなものを感じさせられ、一生かかってもこの日韓の問題からは離れられない、また離れてはいけないという気にさえさせられた。ヒストリー（彼の：男の、権力者の、強者の歴史物語）に隠れたハーストーリー（彼女の：女の、被抑圧者の、弱者の歴史物語）に気づかされたことが大きい。自分の家庭環境の中に見る影のような部分と重なり合い、韓国朝鮮の中に充満している歴史的な苦悩がわがことのように共有でき、共感できた。そして、日本中が貧しさからの脱却を願ったのと同様、自分自身も将来は裕福になることを志向し、世界漫遊旅行を夢見ながらの人生観が、セミナー中で訪れた「堤岩里教会」で大転換してしまった。翻ってみて、神の導きがここにあった、自分の生き方を確かめさせるように韓国に導かれた、と今でも感じる。

小学生の頃、用務員のおばさんが“にんにく”を食べていると聞き、「人間の肉！」と仲間と一緒にはやし立てたことを思い出す。多分あの方は在日の方ではなかったか。そんな軽薄な自分、朝鮮人は乱暴で嘘つきだという大人の言葉を背中に感じながら育った自分を見直す機会となったのが、日韓聖公会宣教セミナーであった。今、拉致問題で日本中が湧いているが、日本がかつて朝鮮半島を丸々拉致したことへの言及が無い。さらには、日本の過去の拉致犯罪を棚上げにして、いまだに残る偏見差別が助長され、「冬のソナタ」は空前のブームを巻き起こしていることに不思議を感じる。

日本の大衆が「冬のソナタ」を超えて日韓の間にある歴史の「ハーストーリー」を読み取り、南北朝鮮半島の平和統一が果たされれば、神に祝福されるに違いない。今まで導いてくれた日韓交流の中にある神の働きに、心から感謝しつつ、さらなる発展を祈りたい。

（きくち・くにひろ　前日本聖公会正義と平和・日韓協働委員会委員長）

日韓聖公会の協働のはじめ

山本　眞

あれはいつのことだったでしょうか、1980年代初めのことだったと思います。管区事務所から呼ばれて東京に行きました。大韓聖公会から数人が来日され、これからの日韓聖公会が協力し合っていくための話し合いだとのことでした。それまでにすでに東京教区は「ＢＴプロジェクト」と称して、釜山教区と東京教区の聖職の派遣交流協働と言った活動を経験していました。その発展としての管区レベルでの交流を開始しようと言うようなことだったのでしょうか。そこに、わたしが呼ばれたのは聖ガブリエル教会を管理していたからなのでしょう。とても大きな責任を感じました。ともすれば、昔のことはさておき、今の、あるいはこれからのことに「前向きに」という声が強くなる中で、歴史的な責任を放り出してはいけない、現実に今日本聖公会の中で唯一の在日韓国･朝鮮人会衆である聖ガブリエル教会がその象徴的存在として、その問題に協働できる関係を作り出したい、そのような思いでした。

幸い、この問題は好意的に受け止められました。第１回目の宣教セミナーの開催に向けて準備が始まりました。大韓聖公会の中にも、そのような過去の問題を蒸し返すのはやめて、互いの協力関係を強めればよいのではないかと言う声も無きにしも非ずでした。しかし準備が進む中で、そこまで日本聖公会が言うのならば、と受け止めて、積極的に取り組む姿勢を明らかにされました。

ちょうど韓国の中でも民主化運動が盛んになり、大韓聖公会も若手聖職を中心に正義の実現に向けて積極的な運動を展開し始めていたときでした。そのような中で第１回目の宣教セミナーがソウルで開催されました。1984年のことでした。本当に残念なことに、私自身はその直前に椎間板ヘルニアで入院する羽目になり、参加できませんでした。しかし、そのときから第4回のセミナーまで、一貫して両国聖公会の歴史を振り返りつつ、宣教の課題を明らかにする共同作業がなされていったと言えるでしょう。そしてその環境の中で聖ガブリエル教会が生野に再建され、聖公会生野センターという地域宣教活動が開始されました。

日韓聖公会宣教セミナーはまた別のすばらしい贈り物をわたしたちにもたらしました。その準備や、大阪での第2回目のセミナー開催のために、わたしたち日本聖公会に属する者以外の多くのすばらしい賜物を持った人たちの協力･援助をいただけたことです。生野の地で共に力を合わせて宣教する超教派の「生野地域活動協議会」の人々でした。在日大韓基督教会の、カトリック教会の、そして日本基督教団の、さまざまな人々、そして教会とはかかわりのないけれども民族教育運動に関わる人々や外登法問題に取り組む人々、障害者差別問題に取り組む人々などもありました。多くの交わりが生まれ、互いに学びあい、助け合いが生まれました。

いま、振り返ってみるとき、その道はいまだ半ばにも達していません。しかし、今小さくされている人々と共に、その目線で歩むことはいつも続いています。

聖公会生野センターの働きに、在日一世高齢者の昼間の過ごす場の新しい働きが加わりました。その歩みの上に神様の祝福が豊かにありますようにと祈ります。

（やまもと・まこと　日本聖公会大阪教区　大阪聖アンデレ教会司祭）

韓日条約40周年と朝日国交正常化交渉の巡り合わせ

金光敏

小泉首相の再訪朝によって、朝日首脳が2002年9月の「ピョンヤン宣言」の再確認と拉致被害者家族の一部帰国が実現した。訪朝後の記者会見では「対立から和解、協力」へと朝日関係を発展させることを小泉首相は強調した。

小泉首相の再訪朝に関わり、選挙を意識したパフォーマンス、あるいは首脳会談の短さを受け、なぜもっと踏み込んで拉致被害者の真相究明を求めなかったのかなどの批判が出た。批判内容は、もっともなことだとは思う。

一方で、小泉首相が内閣総理大臣の立場で表明した「日朝関係を対立から和解、協力へ」、「ピョンヤン宣言の再確認」は意義深い。この「ピョンヤン宣言」の趣旨にのっとり、できるだけ早期の朝日国交正常化交渉が本格始動することを願ってやまない。

さて朝日関係正常化をすすめるにあたり、踏まえなければならないことがある。それは過去の植民地支配に関する言及である。日本政府は、過去の朝鮮半島植民地支配は、日韓条約で確認した通り「もはや無効」であるとし、経済支援をもって植民地支配期の請求権は喪失したとの見解である。

過去の植民地支配を「もはや無効」と記述することは、過去には有効だったが、条約の調印時点で「もはや無効」であるとの意味だ。「日本の朝鮮半島に対する植民地支配は合法的に行われた」という日本政府の見解を貫いた格好だ。当時の韓国は、軍事独裁体制化で戒厳令がしかれ、物々しい政治状況下で韓日条約が交わされた。また、日本においても与党による強行採決で国会批准が決まってしまった。

そうした意味では、来年の韓日条約締結40周年と関連し、あるいはこれから1～2年の間に進むと見込まれる朝日関係正常化において、再び過去の植民地支配に対する正等な記述を求めることが必要だ。日本政府の「植民地支配は合法であった」の見解は、まったく不当なものであり、誤った歴史認識を増幅するだけである。

もし日韓条約同様、将来の朝日条約においても、過去の植民地支配を「もはや無効」と表現することになれば、日本による朝鮮半島への植民地支配が、当初から不当であり無効であったということを国際法上どの外交文書にも記載できず、正しい歴史認識を後世に残す途を狭めてしまうことになる。

これは何も朝鮮半島の人々や在日韓国・朝鮮人にとって重要なだけでなく、日本人にとっても大切なことだ。日本がアジアとの新しい関係を切り開いていくためにも、近隣国と結ぶ条約は英知を集めたものであるべきで、まさに日本人が長い歴史の中で培ってきたコモンセンスの見せどころだ。

私たちは私たちで、朝鮮民主主義人民共和国政府に対し、条約における歴史記述は妥協せず、良識ある交渉を進めることを強く求めたい。日本政府との交渉で、国家請求権を放棄し経済支援方式に同意することはあっても、過去の植民地支配の記述では妥協してはならない。これは後世に対する責務なのだ。

一方、40周年を迎えた韓日条約の加筆、修正、付録交換などを韓国政府は提案すべきだ。40年前の条約批准は、国会が機能停止した状態で行われた。また40年の経過とも併せ持って、現政権が不足点を補う提案は何ら無理でないし、過去に関する記述方法で南北が協調をはかることも重要だ。

私は、在日同胞の人権を確立する上でも、「日韓条約」の再定立は必要だと考えている。「植民地支配を合法」とすれば、その支配下で起こったすべての法律や政令、制度が合法になり、創氏改名も、土地収用も、強制動員もすべて合法になる。また、サンフランシスコ条約以前に起こった「朝鮮人学校強制閉鎖」も、「外国人登録令」施行も、元軍人軍属恩給からの朝鮮人排除なども、すべて合法なのだ。

韓日条約40周年の節目を迎える来年、この時期に合わすかのように進められる朝日関係正常化交渉は、まさに歴史の巡り合わせであり、朝鮮半島と日本の真の友好を考える上で絶対不可欠なものだ。そうした意味でも関心を持って眺め、様々な人が積極的に発言してほしい。

（きむ・くぁんみん　コリアNGOセンター事務局長／教育コーディネーター）

友情の４０年と言うけれど

呉光現

来年の2005年は韓国と日本が国交を回復して40年になる。2002年ワールドカップの韓日共催、冬のソナタを筆頭にした「韓流」と最近は韓日間にほのぼのとした話題がよく登場している。これに目をつけたのかいつからか2005年の韓日国交回復40周年をとらまえて、「韓日・日韓友情の40年」というキャッチフレーズが目につくようになった。全国紙１面を使ってイベントの広告を打ったりもしている。だけど「ちょっと待てよ」といいたい。この40年間韓日は友情の40年だったろうか？生野区に生まれ育った者としてそして47年の人生を送ってきた者として思うことを少し述べてみたい。

物心ついたときから、朝鮮（当時は韓国というより朝鮮、朝鮮人という意識だった）について何も教えられず、ただ親の姿、地域に住む朝鮮人の姿が僕にとっての朝鮮（韓国）だった。皆が等しく貧しく、そして日本に対して期待はせず、民族的なことに日本人が関係することはなかった。僕が意識として「韓国」を自覚したのは1971年に申請期限を迎えた韓日法的地位協定に基づく永住資格であった。これは結局、在日同胞の間に分断と対立を色濃く持ち込んだだけであった。そして高校時代には金大中氏拉致事件（1973年）、文世光氏事件（1974年、大阪生野区在住の在日２世の文世光氏が韓国で朴大統領を射殺しようとした。この事件は未だに多くの謎がある。彼の家は私の家から歩いて5分くらいだった）。学園浸透スパイ団事件（1975年、在日韓国人母国留学生が大量に韓国で逮捕。兄の同級生も捕まり死刑を宣告された）等々である。これらにより、韓国の情報部が日本で暗躍していることを感覚的に知った僕の（僕だけではない、多くの在日が）高校卒業後韓国に留学しようと密かに思っていたことは吹き飛んだ。希望のない日本ではなく韓国人として母国で勉強したいという素朴な思いであった。その後も冷戦構造にどっぷりとつかった日本と朝鮮半島は友情どころか癒着の構造が糺されることなく強化されていった。

しかし1980年代後半以降の韓国の民主化とそれに続く韓国の市民社会の息吹は韓日の関係を問い直す契機になっていった。軍事独裁の時代に封印されてきた戦後補償の問題が韓国をはじめとしてアジア各国で吹き出したのである。日本政府、日本社会はこれに真正面から向き合うことが真の友情を作っていく王道であったが、残念ながら未だにそれはなされていない。しかし、この10年間確実に韓日の市民交流は太く、そして大きな流れになっている。多くの日本人が等身大の韓国を、そして多くの韓国人が等身大の日本を知ろうとしている。その中には私たち在日韓国・朝鮮人も貴重な役割を果たしている姿がある。

今年、韓日聖公会が公式交流20周年を迎える。まさに韓日両政府がいうような偽りの友情ではなく、真の友情が形成されることを願ってやまない。そのためにも韓日間に未だ残されている課題としての朝鮮半島全体の平和、ひいては東北アジアの平和につなげていくためにも、両教会の責務は大きい。

（お・くあんひょん　聖公会生野センター総主事）

本から「在日コリアン」を考える ⑱

高　二　三

<在日>文学論

磯貝治良　著
定価2400円＋税
新幹社

今年は　私は自らのことを在日朝鮮人と呼ぶ。しかし在日朝鮮人に対する呼称のされ方はいろいろあって、在日韓国・朝鮮人や在日コリアンという呼び方が多数になってきているといえようか。ちなみに本欄の呼称も「在日コリアン」である。

私が子どもの頃（1960年代）は、周りにいる人々はみな朝鮮人と呼ばれていたし、呼んでいた。国籍も多くは「朝鮮」だった。1965年に締結された韓日条約の在日韓国人の法的地位協定はその後の呼称のされ方にも大きな影響を与えた。協定永住資格という特典（？）につられて、多くの在日朝鮮人が「朝鮮」から「韓国」に国籍を替えたからである。

しかし我が家的に言うと「法的地位協定」より韓日条約によって国交が回復された事がより大きな影響を与えた。韓国にいる兄弟・親戚が合法的に日本に来るようになった。そして「朝鮮」籍のままでいる我が家に、日本へ行って父親を訪ねる、それだけで「北」の間諜（スパイ）にされてしまう、故に韓国籍に替えてくれ、と懇願するのだ。それで父は外登証の国籍欄を「朝鮮」から「韓国」に替えた。そのことによって変わったことは何もなかった。ただ、サンフランシスコ講和条約の後に生まれた弟と妹は、在留資格の更新のたびに入管にいかなくて済むようになり喜んだ。

当時の私の気持ちは、両親の故郷が韓国済州島であってみれば、まちがいなく現在の行政区画上は韓国であり、自然に逆らうことなく韓国籍を受け入れた。韓国に親近感を覚えたが、兄弟たちとのぎくしゃくした関係は常につきまとい、決していつも晴れた気持ちではなかった。貧乏やみじめは好きではないが母国が貧乏でみじめなのは現実なのだから、そこまで否定しなかっただけである。

法的に韓国籍である私は、在日韓国人と自称すべきなのかもしれない。でも私は、うまく説明できないけど、在日朝鮮人にこだわっている。ルーツも、歴史的に生み出された経緯も同じなのに、どう呼称するかで、政治的立場や思想的な立場にレッテルを貼られ、また処遇も異なり、実際に利害の不一致が容認されている。さらにまた、朝鮮人という言葉に込められた差別性を克服することなく、他の言葉に代えて使うのもイヤなのだろう。

さて私の考えや我が家のことはこの辺で終えて本書の紹介に入ろうと思う。

在日朝鮮人作家が書く文学作品が注目を集めるようになったのは1960年代半ば以降である（奇しくも韓日条約の時代以降である）。それまで主流をしめた一世の作家たちは、日本語で書く作家が少なく、日本語で書くことを朝鮮総連・韓国民団などの組織からも批判されてきた。ところが、金鶴泳（キム・ハギョン）・李恢成（イ・フェソン）ら二世作家の登場により在日朝鮮人文学という言葉が出てきた。それでも以降マイナーな分野のように語られがちだったが、金石範（キム・ソッポム）、梁石日（ヤン・ソギル）などの活躍に見られるように、「（日本）文学の内部にあって“異質”なものを提示し、そのことによってその国の文学状況を相対化＝活性化させ続けて来た」（黒古一夫）のである。

著者の磯貝さんが1977年以来、名古屋で「在日朝鮮人作家を読む会」を主宰してきたことはよく知られている。この永年の読書会で、在日朝鮮人文学の変遷や変容を見極められたといえよう。また〈在日〉が置かれている多様な情況が、〈在日〉作家たちの作品に反映し、それが実にさまざまな主題や方法に挑戦する結果となったと指摘している。現代文学の最尖端に〈在日〉の作家達はいる。呼称のことを含めて一読をすすめたい。

（こ・いーさむ　新幹社代表）

『〈在日〉文学論』は
聖公会生野センターで取り扱っています。
TEL 06-6754-4356　FAX 06-6754-4357
e-mail : ikuno@nskk.org

越境から跨境へ

丁　章

こちらとあちらの境に
威厳高く聳える垣根
いつのまにそんなに高くなってしまったのか
区分の意味しかなかった境に
断絶の意味が積み重ねられ
果てなく築かれてゆく歴史的な垣根
われわれにはその垣根を
軽快に跳び越えられるだけの
跳躍力と
跳び越えたそれだけでなく
なお跨いで踏んばっていられるだけの
余裕ある股下の長さが
必要であり
こちらとあちらの狭間に
口を開けた底無しの深溝
いつのまにそんなに深くなってしまったのか
くだらぬ争いを繰り返すごとに
両者の間に増殖されてゆく反発力が
果てなく両地を引き裂いてゆく
われわれにはその深溝を
軽快に跳び越えられるだけの
跳躍力と
跳び越えたそれだけでなく
なお跨いで踏んばっていられるだけの
責任感をそなえた股下の柔軟さが
必要である

あちらとこちらを
行ったり来たりする反復力
つまりこちらからあちらへと
越えて行ったきりであるのではなく
だからといってあちらからこちらへと
また越えて戻ってきてから
あちらへほんのちょっと行っていただけの
その経験をもとにした有頂天やナマ悟りや
知ったかぶりをすることもない
たえずこちらにありながらあちらにもあり
あちらにありながらこちらにもあるのだけれども
踏み出したこちらの軸足と
あちらに着地した足とを混同せずに
境をしっかり跨いでいられるだけの
強靭な弁別力が
越境を単なる
行ったきりの移住や
流されたままの流浪や
ぶんだくるだけの侵略に
堕落させない
跨境という在り方に
必要である

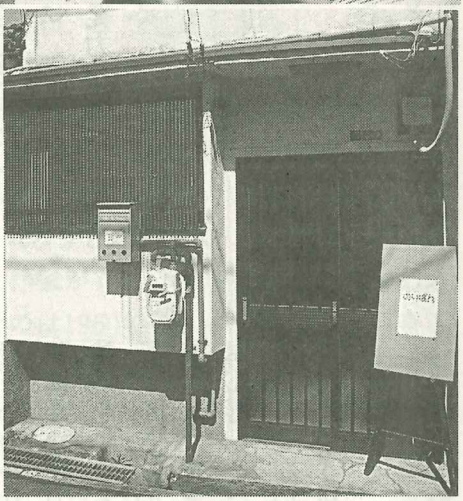
丁　章　（ちょん・ぢゃん）
1968年、京都市にて出生
大阪外国語大学Ⅱ部中国語学科卒業
現在、大阪府東大阪市在住
著書
詩集『民族と人間とサラム』（新幹社）
詩集『マウムソリ　－心の声－』（新幹社）

詩集『マウムソリ　—心の声—』より

『民族と人間とサラム』と『マウムソリ　—心の声—』は
聖公会生野センターで取り扱っています。

のりばん　はじめました

7月7日　聖公会生野センターの新しい活動　在日韓国･朝鮮人高齢者のあそび場「のりばん」が始まりました。「のりばん」とは朝鮮語で遊び部屋。苦労を重ねてきた在日韓国･朝鮮人のお年寄りたちが楽しく集える場所のひとつなりたいと思っています。また在日韓国･朝鮮人の生き様に出会える場として、多くの方々が集える場となりたいと思っています。



在日韓国･朝鮮人高齢者のあそび場

のりばん

毎週水曜日　12:00～16:00
（お食事12:30～　おやつ15:00～）
利用料　350円

調理ボランティア募集中です！

7月7日のオープンハウス
近所のたくさんの方々がお祝いに来てくださいました。

余韻

○○周年とよく言う。2005年は日韓国交回復40周年、日本敗戦・朝鮮解放60周年そして朝鮮を実質的植民地にした保護条約100周年である。

在日韓国･朝鮮人が形成される原因から100年になる。この100年間で被害を受け戦争の犠牲者になった韓国･朝鮮人に対し未だに日本政府からの公式の謝罪、そして補償はない。ましてや在日韓国･朝鮮人に至っては何を言わんかやである。無年金が大半の在日一世高齢者、民族教育の権利を認められず自らのアイデンティティの形成に苦しむ在日の若い世代。来年の日韓国交回復40周年を巡り、日韓両政府が“友情の40年”と　銘打って様々なイベントを企画している。そして巷では冬のソナタブーム、韓流ブームで、それを後押ししているかの如くである。しかし、この40年は“北朝鮮敵視40年”でもあった。拉致事件以降に、在日朝鮮人への暴行や嫌がらせが多発したのは、その深刻な結果でもあった。

いまこそ私たちは、節目の年にしっかりと過去を振り返り、冷静にこの社会を、そして東北アジアの一員として、平和を創り出す者になり、平和の器となりたいものである。（ピックァンチャ）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費
年額　1口 3,000円（個人）　1口 10,000円（団体）
・郵便振込00960-0-133429「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金
・郵便振込 00910-1-321780「聖公会生野センター」
・銀行振込 ＵＦＪ銀行 東大阪支店
普通預金　3711311「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター
〒544-0003
大阪市生野区小路東1-17-28
TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357
E-mail: ikuno@nskk.org
http://www.nskk.org/province/ikuno
発行人：齊　藤　　壹
編集人：大　橋　　襄

ウルリムは古紙100%の再生紙を使用しています。